

芸術の力について、ともに考える

後藤 文子 ごとうふみこ

文学部美学美術史学専攻 准教授

開講からようやく4年目を迎えた近代美術史の研究会です。多彩な関心をもった3年生20名と4年生17名が在籍し、芸術について共に考え、研究に取り組んでいます。

芸術と向き合い、芸術について深く思考し、そして芸術をこの身をかけて受け止めようと努めることは、実は生きるという根源的な営みと分かちがたく結び合っている——私が強くそう実感するようになったのは20代のことでした。そしていまもかわらず、私にとっての研究の根底には、これが信念のように横たわっています。

私たちが研究対象としている芸術作品は、れっきとした「物」です。すなわち、本来は物言わぬ「物」と向き合うことは沈黙した時間のなかでの孤独な取り組みにちがいありません。しかしながら芸術が芸術たり得る所以として、それが本来的かつ本質的に備えている公共性という特性は、私たちを決してそのような孤独な時間のなかだけに押しとどめはしません。むしろそれは私たちに、開かれた批評性のもとで、ほかでもない「人」とともに作品を観て、共感しあい、意見を交わしあう、そのような感性的な体験へと誘うのです。

作品を観る眼、感じとる心、分析する思考、そして身体的な感覚をも、作品を介して場と時を共有する人々と互いに交われ、作品体験を共にすることによって、私たちは、自分一人による孤独な取り組みのなかだけでは見えてこなかった芸術のもつ本質的な力に気づかされるのです。その意味において、研究会は、まさしく芸術を広く共有する場であると言えるでしょう。

美術館ではなく、画廊でもなく、ほかでもない教室で行われる研究会にあって、無論、参加者による作品体験の共有は難題です。しかしたとえ作品を眼の前にしていなくとも、本来芸術が、私たち一人一人の心身の働きをフルに発動させて向き合うべき対象であること、そしてこの先もずっと長く、自分たちに生きることを見つめさせてくれる特別な力を秘めていることを、想像力をたくましくし、常に学生とともに考え、気づき合うことをあきらめない。そのための試行錯誤が今日も続いています。

こんにちは、後藤文子ゼミです

ながやすさとみ

永易里美君 文学部美学美術史学専攻4年

当研究会メンバーの関心はオーソドックスな近代美術史研究以外にも多岐にわたっており、モネやマネ、ゴッホといった誰もが知る画家についての研究から、写真、デザイン、ファッションといった領域にまで裾野を広げ、各自の課題に日々取り組んでいます。

例年前期は先生の提案で3・4年生の共同研究がなされており、今年は特に、私たちが生きるなかで体験する身近な感覚と近接するものとしての芸術・アート、という視点で研究を始めました。後藤先生の持つ柔らかな雰囲気です研究会はとても居心地の良い場所となっていて、頭を柔らかくして一人一人が刺激し合うのに最適な環境が整っています。



考える脳、行動する脳 —健康と病気—

神経内科―謎の多い脳疾患の病態解明に挑む慶應内科医の集団

鈴木則宏

医学部 教授

「神経内科」はきわめて広い臨床の守備範囲を持つ。神経内科があつかう疾患の患者の訴えは、「片側の手足が動かない」「ふらついて歩みにくい」「呂律が回らない」「物が飲み込みにくい」などの運動障害、「手足の感覚が鈍い」「激しい頭痛がする」などの感覚障害、「朝食食べた物を思い出せない」「自分の家族が誰かわからない」などの認知機能障害、「気が失う」などの意識障害など、さらには救急車で搬送されるような「激しいめまい」「全身がけいれんする」などの救急症状まで多岐にわたる。これらの多彩な訴えから、神経内科特有の疾患である脳卒中、筋ジストロフィー症、てんかん、アルツハイマー病、パーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症、ギラン・バレー症候群、三叉神経痛、多発筋炎、多発性硬化症、狂牛病（プリオン病）、重症筋無力症、顔面けいれん、片頭痛など多くの疾患を鑑別し診断するのが神経内科である。

昼夜を問わない診療活動に加えて、私たちの研究室ではいくつかの疾患に対して精力的な研究が展開されている。脳卒中の急性期における脳血管―グリア細胞―神経細胞連関の機能障害の病態解明、片頭痛の前兆症状の発現と頭痛の解明、神経変性疾患（パーキンソン病や筋萎縮性側索硬化症など）に対するiPS細胞樹立とそれを用いた治療法の開発、重症筋無力症における新規自己抗体の同定と病態の解明、が研究の大きな柱である。また、このように日進月歩の神経内科学の真髄を医学部学生に情熱をもって伝授するの也是我们の重要な役割であり、自主研究、系統講義（基礎診断学・各論）に続き臨床実習（基礎ポリクリ・アドバンストポリクリ）、症例検討をマンツーマンで行っている。難病とされる多くの神経疾患の完治に私たちの研究成果が役立つことを夢みて、多士済々の若き仲間たちと毎日楽しく臨床・教育・研究に邁進している。

日米神経内科実習体験

よし だ けいすけ
吉田啓佑君 医学部6年

4月下旬より米国Johns Hopkins大学にて1ヵ月間臨床実習を行った。Hopkinsは21年連続全米No.1病院、Neurologyの分野でもトップにランク付けされている。留学の下準備として、試験期間や春休みを利用して、鈴木先生率いる神経内科で追加的に実習する機会を頂いた。回診やカンファレンスに参加し、診察手技に触れ、貴重な症例や最新の研究に関する知見を広められたこと、英語による解説や質問を受けられたことは、私の未熟な知識や拙い英語を強化するのに大いに役立った。実際に渡米して、病院や研究施設のハード面には圧倒されたが、診療やディスカッションのレベルは慶應も全く引けを取らないと感じた。日米での実習体験を生かし、今後も神経内科について深く学んでいきたい。



地域から世界を読む 地域研究とアカデミック・ディシプリンの対話と融合を目指して

ひろせ ようこ
廣瀬陽子

総合政策学部 准教授

2年生3名、3年生6名、4年生10名で、世界各地の地域研究を通じて国際政治を読み解き、アカデミック・ディシプリンとの対話と融合を模索する。

冷戦終結後、冷戦中に容易に行かれなかった地域でも調査が可能となったこと、イデオロギー・バイアスが減少

したことなどにより、真の地域研究が可能となり、学界においても地域研究が盛んになっている。しかし、地域研究は学界の中でいまだ浮いている感がある。なぜなら、地域研究者は「自らの地域の特殊性」を主張し、一方的な情報発信に終始する傾向が強いからだ。確かに、ある地域を詳細に研究すればするほど、その地域の特殊性が際立つため、そのような傾向が強まるのは当然ともいえる。だが、それでは地域研究者の自己満足に終わり、学界における研究の発展は望めない。

そこで、本研究会では地域研究とアカデミック・ディシプリンの対話と融合を模索していくことを目的として、地域研究をより広いアカデミックな文脈に応用できるような研究を行っている。地域研究を特定地域の課題の検討だけで完結させず、それをもっと広い学術的な文脈で生かせるようにし、他

地域の専門家や理論研究者などとの対話を可能にして、学術的な貢献をすることを目指している。

履修生の研究対象の地域やテーマは多岐にわたり、さまざまな地域・テーマの地域研究の対話を進めており、毎週2コマの研究会と合宿で、各学生の個人研究発表、毎学期異なるテーマと地域で行う「地域の比較研究」のグループ研究と発表、輪読を行っている。

研究会には、大学院生や卒業生も参加してくれており、毎回、内容の濃い議論が繰り返されている。研究会メンバーはグループ研究や夏・冬の合宿を通じて親睦を深めており、また、OB・OGの結束も固く、2002〜05年の総合政策学部・有期専任講師時代に開講していた研究会のOB・OGと現役メンバーの合同の会合なども行っている。研究会が、学問を究める場となるだけでなく、人生にとって大切な人間関係を築く場となることを切に願いつつ、私も日々学生と共に学びを深めている。

多様な世界を多様な視点から

さわだ ひろと
澤田寛人君 総合政策学部4年

廣瀬研究会を端的に表わすならば、「多様性」という言葉がぴったりです。廣瀬先生のご専門は（とりわけコーカサス地域をめぐる）国際政治ですが、私たち学生は（それを気にせず……）文字通りさまざまな領域／地域に関心を持っています。アジアやアフリカの諸国／諸地域を研究対象にする人もいれば、社会学やネットワーク分析など、他のディシプリンの知見を巧みに取り入れる学生もいます。また、学びの場のみならず、飲み会でも、それはそれは多様な光景が広がることもしばしば……先生も私たちの（主に知的な……）多様性を快く受け入れてくださり、先生と学生の間で、絶えず良い化学反応が起きています。多様な世界を学ぶには、この上ない環境であると言えるでしょう。



少子社会だからこそ助産学を学ぶ

2006年度に助産師国家試験受験資格を取得するコースとして設置されました。確かな根拠と人間的な温かさを融合させたケアの提供を目指しています。

こんどうよしえ
近藤好枝

看護医療学部 教授

私の専門領域は母性看護、特に妊娠・出産を支援する助産という領域です。少子社会が加速するわが国にあって、健康な次世代を生みだし、育成することを支えるという役割を担っています。毎年、受講を希望する学生が多い領域でもありますが、さまざまな制約があり、履修者数を制限せざるを得ないという悩みも抱えています。

科目の目標は、母子保健活動の多様な場において、広い視野で妊産褥婦・女性・家族のニーズに応え、自立して実践できる能力の育成です。特に近年は周産期医療の高度化により期待される役割が広がり、診断能力の強化やドメスティックバイオレンスへの予防的対応についての理論的学習、さらには新生児集中治療室におけるケアや新生児蘇生法の習得など、より高度の臨床実践能力が求められるようになっていきます。

学内演習ではProblem Based Learning (PBL) チュートリアルやシミュレーション学習をとって理解の深化を

図っていますが、妊婦や乳幼児に接する機会がほとんどない学生にとっては、具体的な状態をイメージすることは難しく教育指導にもさまざまな工夫が必要になっていきます。さらに、臨床の場では、助産師らによる指導を受けて、学内で学んだ理論と技術を実際に活用する術を身につけていきます。女性に寄り添って、どのようにしたらその人の産む力を引き出し、安全で納得のいく出産を支援できるのかを学びながら、女性やそのご家族の喜ぶ姿に動機づけられてもいます。時には、望まれていない出産や家庭内暴力などの現実に遭遇することもあり、助産学に関する知識・技術のみならず、的確な観察力・判断力と倫理観を育む必要性を知ることになります。ある助産師が語った「分娩介助とは、神様から授かった命を家族のもとへ静かに受け渡す役割であり、安全に、厳かに、静かにバトンタッチをするのです」という言葉は、学生のなかに深く刻まれて、助産師としての姿勢を形成する助けになっています。

助産学との出逢い

ささきゆき 佐々木祐樹君 看護医療学部4年

私たち助産課程の4名は、3月より授業を開始し、日々助産師としての知識や技術、心構えを学んでいます。特に、助産理論のPBL学習は、新たな視点に気付くことができるだけでなく、自己の課題も明確になり学習意欲が高まるため、非常に刺激的です。

先生は臨床での経験も踏まえて講義してくださるので、全ての内容が印象的に心に残ります。また、一人一人の個性を理解し、いつも温かく私たちをサポートしてください。

恵まれた環境にいること、そして妊婦さんや先輩助産師との出逢いに感謝しながら、妊娠から出産というライフイベントを、ニーズに応えつつ心身ともにサポートできる助産師を目指したいと思っています。

